

令和7年度版「学力向上ポータルフォリオ(学校版)」【柏崎小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	次年度も引き続き、教科ごとの学習内容とスキルの繋がりをより明確にし、年間指導計画に明記することで、いつでも誰でも一定の質を保ったスキルタイムが実施できるようにする。また、算数科・国語科を中心として、年間指導計画に毎単元の最後に「習熟の時間」として内容を加え、児童の実態に応じて教員の裁量で補習できるように時数の余裕をもたせる等、学校全体での取組が必要である。さらに、家庭学習の充実も目指し、一人ひとりの学習到達度に合わせた宿題や課題が出せるように家庭との連携に取り組む必要がある。
思考・判断・表現	去年度にも引き続き、学校課題研究を軸として教員が各々の指導観や児童の実態に応じて授業改善策を進めた成果が、明確に児童の姿に表れている。(④、⑤に記載)次年度は、引き続き、前年度(令和7年度)までに学んだ学習方法を児童が継続して活用することで、習得し、他教科や実生活にも生かせる姿を求めたい。そのために、学校全体で授業スタイルや児童の学習方法選択の支援策等の共通理解をさらに図り、計画的に継続して実施していく。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> <学習上の課題> <ul style="list-style-type: none"> ・「話すこと・聞くこと」の力の定着 ・基礎的、基本的な知識・技能の力の定着 <指導上の課題> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な読み、書き、計算の児童自身の習熟状況を児童自身に明確に把握させることが不十分である。 ・教科担任制等により、授業時間外などにおける弾力的な補習や反復した指導が十分できていない。 	令和6年度さいたま市学習状況調査の結果と、学校課題研究のテーマを鑑みて作成したカリマネデザインマップを軸として指導を進める。そこに示した各学年重点単元において、児童による目標設定、学習方法の選択、振り返りを行うことで、自身の学習達成状況を客観的に把握させる。【カリマネデザインマップに示した重点を置いて指導する単元において実施。】
思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none"> <学習上の課題> <ul style="list-style-type: none"> ・「話すこと」の力の定着 ・「書くこと」の力の定着 ・既習を生かした自力で考える学習や協働的な学習 <指導上の課題> <ul style="list-style-type: none"> ・児童一人ひとりに合わせた指導、支援の個別対応や、思考を広げる協働的な学習への効果的な取組につなげていく必要がある。 	学校課題研究と関連付け、個別最適な学び、協働的な学びを柱に据え、スクールダッシュボード等の活用によって、児童の習熟度や達成度を把握し、個々の実態に応じた指導、支援を繰り返していく。【カリマネデザインマップに示した重点を置いて指導する単元において行う振り返りを元として実施。】

全国学力・学習状況調査
＜小6・中3＞(4月～5月)

⑤	評価(※)	学力向上策の実施状況
知識・技能	B	算数科・国語科の同集団経年比較(令和6年度第3学年～第5学年と令和7年度第4学年～第6学年)の結果として、第4学年国語科、第5学年算数科、第6学年国語科・国語科における学力の向上が見られた。個別最適な学びの実現を目指し、児童に学習方法や目標を設定させる学習スタイルを前年度よりも多く導入したことにより、国語科・算数科を中心に学力の向上が見られた。基礎的な内容の反復的な学習量が前年度より相対的に減っているにも関わらず学力の向上が見られた要因として、上記①で示した学力向上策を軸とし、教員各々が授業スタイルを学習内容や児童の実態に応じてバランスよく適切に用いることができたと考えられる。
思考・判断・表現	B	算数科・国語科の同集団経年比較(令和6年度第3学年～第5学年と令和7年度第4学年～第6学年)の結果として、算数科における「データの活用」において、3学年とも学力の低下が見られた。一方、さいたま市平均よりは低いものの、国語科における「読む」領域において、同集団内での学力の向上が見られた。全教員が教科種別関係なく、学校課題研究において「自分の力を明確に把握し、自らの学びを調整する力を児童に培う」ための授業改善を計画、実施、継続した成果が現れていると考えられる。また、その支えとなったスクールダッシュボードの活用も、定期的に教員間で声を掛け合い習慣化が促されていた。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語では、「我が国の言語文化に関する事項」において、理科では、「エネルギー」「生命」を柱とする領域において正答率が高く、授業改善の効果が見られた。一方、算数では、全体としてつまずきのある児童が多く、特に「数と計算」「測定」の内容について大きくつまずきが見られた。年間指導計画と比べてみると、近い時期に学習していたものについて正答率が高いことが伺える。また、「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれている」という質問について、100%の児童が肯定的に回答している。基礎的・基本的な内容に関する児童の苦手な内容について、一人ひとりの実態を教師が把握し、適切な指導・支援が継続されていることが伺える。
思考・判断・表現	算数・国語・理科の「記述式」の問題につまずきのある児童が多く見られた。一方、「分からないことやわくわく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできる」という問いに関しては、97%、「学校の友達との間で話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、新たな考えに気付いたりすることができている」という問いに関しては100%の児童が肯定的に自己評価しており、日頃の授業で児童の実態に応じた授業改善や工夫が進められている成果の一部が伺える。ICT機器を活用した授業について、「友達と考えることができる」「友達と協力しながら学習を進めることができる」と肯定的に回答した児童が97%である。令和6年度から引き続き高い評価結果となっている。思考力・判断力・表現力の育成において必要となる「ICTを活用して児童同士で考えや意見を共有する時間」を学習計画の中に効果的に位置付ける授業改善の工夫が、学校全体で進められている成果が伺える。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)
- ③分析共有(各教科・各学年の実態把握)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	本校の正答率がさいたま市のものより高い問題区分は、「動画視聴」問題に多くある。一方、国語の「読む」区分に関しては平均以上となる学年はなく、このことから、本校の児童は「文字を読む」情報取得より「聞く」「見る」情報取得による理解が容易な児童が多いと考えられる。また、国語の「書く」区分では大きく正答率が落ちており、活字に対しての基礎的な知識・技能、また文字への慣れが不十分であると考えられる。各教科の正答分布は、各教科一般的な山なりの分布となっている(中央部に頂点が近く、離れるほど低い)が、その全体はさいたま市の平均と比べて低い値に寄っている。このことから、本校は全体的に学習に難しさを感じる児童があり、一部の児童に学力の高低が偏っているわけではないことがわかる。
思考・判断・表現	生活習慣に関する調査項目「授業中、分からないことがあったときに、先生や友達に聞いたり、本やインターネットで調べたりして、自分でどうすればよいかを考えることができているか。」及び、「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか。』に肯定的に回答する児童が多い。他者と関わりながら対話的に学習を進めたり、自分で学び方を決める「自走した学習方法」に慣れ親しめていることがわかる。学校課題研究でテーマとしている「個別最適な学び」と協働的な学びを一体的にとらえた授業計画、展開の継続が、児童の他者と関わり合うことへの肯定的な価値観を育み、思考力、判断力、表現力の伸長につながっていると考えられる。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	C	児童による目標設定、学習方法の選択、振り返りを教科、学年の実態に応じて推進できている。一方、自身の力に合わせた適切な学習方法の判断、選択が難しい児童にとっては、授業中の基礎・基本の習熟が効果的に進んでいるとはいえない場合もある。学習したタイミングでは理解できている児童が多いことから、直接的に、基礎・基本に関する学習内容に反復して取り組んだり指導を受けたりして、定着する学習活動の機会を設定し、実施する必要がある。	年度初めに設定した案に加え、特に基礎・基本の習熟を目指した練習問題に取り組み時間を朝のスキルタイム(毎週1～3回、15分間)として年間指導計画に位置付けることで、スキルタイムの確実な実施と毎時間変化する児童一人ひとりの習熟度に合わせた適切な課題を提供する。また、児童の苦手が増える予想される学習時に、スクールアシスタントの配置をその実態に応じて工夫し、支援を厚くする。
思考・判断・表現	B	重点を置いて指導する単元を適切なタイミングで学年や学校課題研究で組織された研究グループ内で確認するとともに、指導方法の工夫と実践を繰り返している。一方、自身の力に合わせた適切な学習方法を、児童自ら判断、選択する力は短期間で身に付くものではないため、引き続き実施と見取りに努める。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)